

北九州市農林水産業振興計画検討会（第2回）議事要旨

- ・ 担い手の確保の問題、生産環境の保全、都市との共存は、全てつながっている。
- ・ 少子化や高齢化により離農する農家がものすごく出てきている。
- ・ 市は、遊休農地や荒廃農地を把握していると思うが、具体的に把握していれば、どこに欠陥があり、どうすれば防げるのかがわかると思う。
- ・ 農地を集積するためには基盤整備が進んでいないと厳しい。生産性も高まってこないし、収益を上げるにも合理性が伴わない。
- ・ 遊休農地に関しては、農業委員会や農政事務所と一緒に農地パトロールを積極的に行っていく。
- ・ 既存の農家の中で遊休農地の発生防止や解消ができればよいが、地域の状況や土地の状況によりそれが難しければ、地域のむらづくり活動の中で広い視野で面的に考えていく。その中で農地をどう活用していくかについて考えていくと、基盤整備による解消や担い手への農地集約による解消といったいろいろな出口があると思う。
- ・ 農地は個人の財産なので、所有者や耕作者の意向を反映させないと先につながらない。まずは合意形成のためのむらづくり活動を進めていきたい。
- ・ 高齢化が離農の一番の原因。機械を扱うのも危険が伴い、身体の不自由もきかない、施設が老朽化して出費も嵩むが、子供は都会に行って帰ってこないのでもうどうしようもなくなって離農するというのが現状。
- ・ 意欲のある担い手もいるが、田んぼも曲がって機械化ができないような場所では厳しいので、とにかく基盤整備が必要である。
- ・ 林業に関しては、森林環境譲与税について、北九州市は県内でも、福岡市に次ぐくらい国から交付金が出ているので、放置竹林対策や荒廃森林の整備を十分にやっていただきたい。
- ・ 竹林所有者は管理したいという意向はあるが、高齢化で厳しい。生産する面積がだんだんと小さくなっていく。林道の整備されているタケノコを搬出しやすい所が中心になって、山奥の遠いところは手が入らなくなって荒れてくる。
- ・ イノシシの侵入を防ぐ国のワイヤーメッシュ事業については農政事務所にも協力してもらい、イノシシの被害は結構抑えられているが、イノシシはあらゆる場所に出没するので、鳥獣被害対策もあわせてお願いしたい。
- ・ 猟友会は高齢化して減少している。行政も把握していると思う。

- ・ 高齢化の話があったが、もう70歳近い。重たいわなを持って山中に入り、ほぼ毎日見回って、わなにいったイノシシを仕留めるというのは大変な作業。このような活動をこれからも続けられるのか大きな課題である。全国的にも同様な状況である。北九州は人数の面では県内各市町村の中でも多いほうではあるが、その中でもやはり苦勞されている現状がある。
- ・ 地産地消に関し、市民の皆様には北九州産の野菜や魚をなるべく食べてもらいたいと思うが、料理方法などを投げかけるともっと食べてもらえるのではないかな。
- ・ 食育イベントを年に1、2回開き、市場の方が野菜を展示してくれるが、そのときに野菜を使った料理のレシピや北九州産の野菜等を使った加工品のPRをすれば、使いやすいし、買ってくれるのではないかな。
- ・ 現在、北九州市は学校給食で地産地消に力を入れているが、個人的には小松菜と水菜を学校給食に提供している。近年、小松菜の需要が高まっている。生産者にとっては大変嬉しいことである。若松の大根や春菊がシーズンだが、学校給食には使われている。
- ・ 農協も学校給食に関する協議会のメンバーに入っているから、市民がどういうものを望んでいるのかなど情報交換しながら学校給食に提供している。
- ・ 農協が要望するものが使っていただけるかというのものもあるし、直売所に出すものより規格が厳しくなっている。簡単に出せばよいが、学校給食の規格に合ったものがなかなか難しくなっている。その点が課題である。
- ・ 地産地消については、八幡、小倉南、若松に直売所があり来店客も多く、販売に占める割合も大きなウエイトを占めている。
- ・ エフコープもコロナになって販路が見出せなくなった酒蔵など地産地消の作り手について、各地区の支所別に企画をして地ビールやお酒を組合員に提供できるように、組合員の話し合いの下、地域に密着した生産者の販路を考えている。北九州市にも5支所があるので、市は違うが豊前から作り過ぎたオクラなどを北九州に流していくなど、作り過ぎた場合の販路を作っていくことも食品ロスの観点から考えている。
- ・ 地産地消というと、北九州市で採れたものを北九州市民で消費していくことに目が行きがちでそれはそれで重要だが、地域の中で消費できればよいという話である。北九州の野菜や魚を誰が喜ぶかという観光で来た人である。北九州に来たからには北九州のものを食べたいと思うはずで、市内のレストランやホテルで観光客向けの地産地消の取り組みをやれば、消費拡大に役立つのではないかな。今はコロナで観光自体が止まっているが、数年後にはインバウンドも復活するので、長期計画なのでそういった点も盛り込んではどうかな。それは当然ブランド化にもつながっていく話だと思う。
- ・ KPIの設定は難しいと思う。今回出しているKPIについてももう少し整理できるのではないかな。KPIと書いているが、活動指標を挙げているのがほとんどだと思う。市役所として何をやるのかというもの。一方、成果指標のようなものも交じっている。施策の結果としてどういう成果を出すかといったものが混じっている。例えば、認定農業者数は成果であり、情報発信回

数は活動である。

- ・ もし、認定農業者数を100とするなら、どういう施策をどれくらいするかといった活動指標が必要なのでは。例えば申請のお手伝いどれだけするか。そういった点を統一した方が良いのではないか。
- ・ また、KPIの主体が市役所であるものと、農業従事者なり農業経営者が主体となっているものが混在している。例えば直売所の販売額は市が直接売るわけではない。違う主体が混じっていて、その辺も少し整理できるのではないか。
- ・ KPIを作るのは難しいが、この2点を少し整理したほうが後々混乱しなくてよいのではないか。
- ・ この振興計画を出して、全てを市が実現するのは難しいので、農林水産業従事者や各団体や、市民も含めて共有することが必要。
- ・ 計画を作って、関係者に配って終わるのというのが多いと思うので、計画の活用について、ぜひ考えていただきたい。
- ・ 市の振興計画は、5か年計画だが、現在、JAでは3か年計画を検討中で、その中でリンクしてくる部分もあるので、そこは行政と一緒に進めていきたい。
- ・ 市民を巻き込みながら一緒にやることが大事である。例えば大学生を取り込んで、SNSといった得意な部分で、アンバサダーとしてなど一緒に協力して情報発信するやり方もあるのではないか。
- ・ SNSは自分の興味があることでないと目に入らないので、印象的なイベントや、面白そうだと色々な人に見てもらえると思う。
- ・ 例えば、インスタグラムだと美味しそうな食べ物、見た目、いわゆる「映える」ものが響くのではないかと思う。
- ・ 給食の話で、中学校までは給食があったが、高校になってからは弁当や学食になる。高校生のときに中学校の給食の話をして懐かしく感じたことがあった。高校生や大学生、大人の方々にも給食を食べる機会があれば、懐かしい気持ちにもなり面白いのではないか。
- ・ 北九州の給食で言えば、キャベツの炒め物が美味しかった。
- ・ 大学生とコラボして若松の野菜で商品開発をしたが、あまり大きな事業にならず、試作の段階で終わっている。それを積極的にやっとうという動きにはなっていない。給食ではないが、直売所で販売できるような取り組みは初めている。
- ・ 平成5年から農業の会社を経営している。色々なことをしてきて、人々の意識の変化をすごく感じる。昔は農家をしていたら継がないといけない、土地を守らないといけないという考え方だったが、今は働きに都会に出たりするのが現状である。

- ・ 後継者がいない農地で、お金は要らないから何かを作ると言われるが、いろいろな農地がある。当初は、要望があればどれでも作っていたが、農地が増えてもう限界だと感じている。農地も選ばないとできない。
- ・ 当社の従業員である若い男性は、夏のアルバイトから初めたが「農業って面白い、農業っていいな」と言って、続けてくれている。土をいじるのが好きという気持ちを大事にしてあげたい。
- ・ 非農家の方が農業をしたい、楽しいと言ってくれるので、それに見合った最大限の報酬をあげたいが現実的には難しい。
- ・ 昔はある程度、作った分は返ってきていたが、今はコロナの影響もあるが、資材の価格は上がるが、単価が上がりず、作れば作るほど赤字になるというのが現状である。
- ・ なぜ継がないのか、なぜ継げないのか、なぜこの仕事を選ばないのかというのは、全てこの中に集約されている。農業は素晴らしい仕事と思うし、担い手を育てていきたいが、現実の生活があるので、頑張ればサラリーマンに負けない、頑張っただけもうかるといったところにもっていければ、もっと担い手が増えるのではないか。
- ・ 実際には、誰か畑を買ってくれないかという声がたくさんある。昔は代々続けてきて自分の代では手放したくないという意識があったが、今の若い人には早く売って金にしたほうがよいという意識もある。家族構成が変化した影響もあると思うが、親も子供に迷惑をかけたくないという方もいる。
- ・ 作るのは最終的には人なので、頑張れば頑張った分だけの達成感がないと続けられない。
- ・ 若い人が頑張っているのも事実で、農業をしたことのない者も頑張っているのだから育てていくかが課題である。
- ・ 社員教育というわけではないが、例えば、スイカなど作って楽しいと思える作物を作らせて意欲を引き出している。
- ・ 色々な規制があり、生産基盤を持たない非農家の新規就農は難しいと思う。非農家の社員は、会社の中で引っ張っていつてくれればいいと思っている。何人かは他県で独立している。
- ・ 障がい者施設の方の新規就農を紹介しているが、色々な規制があって6次産業は認めるが、面積が大きいのは認めないなど色々な規制がある。
- ・ 障がい者がものづくりして、パック詰めして加工してということを進めているが、都市計画なり宅地指導の規制があってダメだとされた。30アール以上農地を取得するか借りなければ農業者として認められないが、それができても、ものづくりの規制がかかっているので、それを何とかできないか。規制緩和できないか。
- ・ 今、新しい取り組みでやっている人たちもたくさんいるので、そういった人を応援したい。行政にも協力していただきたい。新しく農業をやりたいという方へもう少し、あたたかい援

助が必要ではないか。

- ・ 新規で農業を始めるには機械や倉庫などの投資に 1,000 万円ほどかかる。そのあたりも改善しないといけない。
- ・ 専業農家だけではなく、サラリーマンをしながら農業に取り組む方も含めて将来を考えていただきたい。
- ・ 大学生は、実際に農業の手伝いなどをしてみないと楽しさや魅力がわからないので、アルバイトやボランティアなどを募集すればよいのではないか。
- ・ アルバイト等の相談があれば紹介はできると思うが、学生から相談を受けたことはない。
- ・ 自然が好きで土を触りたいけども、どこの誰に直接行けばいいのかわからない。農林水産業者の顔が見えないので、つながるためには仕組みが必要で、ワンクリックでつながるようなシステムがないと難しいのではないか。こうした発信があればずいぶん変わるのではないか。
- ・ 包括的な理念に SDGs を打ち出しているが、北九州市は全国では初めて SDGs 未来都市として選定されているので、それを打ち出せば良いのではないか。
- ・ ワンヘルスでは、動物の命を守るという意味から、全ての命が守られながら人間との関係性も保った環境づくりを考えていかなければならないので、鳥獣とのすみ分けができることが重要と思う。
- ・ 農事センターなどで学生が体験できる機会を作り、農業の楽しさを覚えた学生が実際にやってみたいと思うようになれる連携が取ればよいと思う。
- ・ 指標の 2 番目に「多面的機能を評価する市民の割合」とあるが、適切に経営されたり管理されている農地や森林などの面積を指標にすることを検討してもよいのではないか。
- ・ 農地の保全に関して、JA では子会社を立ち上げ、最後の担い手という位置付けで、保全が困難になった農地を守る取組みを行い、職員を配置している。ただ、かなりひどい農地ばかりで、今後そういう農地が増えていくと受け入れは無理かと思う。北九州市の農地の保全は JA だけでは厳しいので、行政に手伝ってほしい。
- ・ 良い条件の土地は借り手がいるが、JA は誰も引き受け手のない農地しか引き受けるしかないで困っている。JA の負担は結局は組合員が負うことになる。
- ・ 多面的機能を発揮しているというのは大事だが、それをどう評価するかは難しいと思う。市政モニターアンケートで聞くというのは案としてはよいが、聞かれた方は多面的機能とはどういうものかといった説明がないと答えられないと思う。例えば、水田の保水機能がどれくらいなのかなど、どこまで具体化して市民に理解してもらうのか、もう一段工夫する必要があるのではないか。
- ・ 多様な担い手は大切だが、「目標」の欄にも「10 年度後に目指す姿」の欄にも「多様な担い手」という同じ枠組みが提示されているので、「施策を横断する重点的な取組」の内容は、例

例えば「新しい仕組み」や「新しく参入してくれる人」を重視して、「異業種連携」、「新規参入」などの文言を入れて取り組んでいくというのはどうか。今回の計画の5年間で、とくにどんな担い手を求めていくのかを示すと、施策が具体的になると思う。

- ・ ワンヘルスだが、ヨーロッパのような水準に近づくには解決しなければならない問題があると現場から聞いている。ワンヘルスを進めていくときに、アニマルウェルフェアをどうするのかも同時に考えていかないと現場が混乱する場合もあるのではないかと。中山間での鳥獣害被害の対策も重要だが、野生動物の駆除の話とワンヘルスを具体的にどのように施策として実施していくのかというあたりが、この理念に従ってどんどんいろんな施策を進めていくと、矛盾と言うのか、解決しなければならない課題と言うのか、言葉はいろいろあるが、1つの課題になるのではないかと。
- ・ かなり広く農林水産業のフードバリューチェーン全体にかかわるステークホルダーを担い手と位置付けているが、農林水産業の生産に関わる経済主体がしっかりしてないとバリューチェーンは成り立たない。特に地産地消も強調しているので、実際に農産物、水産物、林産物等の生産に関わる方が安定的に存在してなければ、その後のバリューチェーンが成り立ったとしても、地産地消につながらない。そういう意味で具体的に農林水産業に関わる直接の担い手をどのように想定するのが重要。
- ・ 「農林水産業を生業とする農林漁業者」だけでもものすごく多様で、例えば県庁勤務だが家に田んぼがあるので農家に分類される方、民間企業リタイアした後に農業をやっている方、あるいは農業法人を農家が立ちあげて中小企業として農林水産業をしっかりやられている会社経営もある。それぞれ役割があって重要だが、もう少し踏み込んで考えないと、施策を進めていく上で、場合によってはピントはずれになったり、あまり政策効果がなかったりということにならないか。
- ・ スマート農林水産業ということで今注目されているが、農林水産業の現場の担い手の方々の本当にメリットになるのか、そういう方々が本当に望んでいる形で進んでいくのか、あるいはそうではなくてスマート農林業に関するいろいろな機材とかシステムとかサービスを提供している業者の方が潤うのか、その辺についても目配りをする必要がある。
- ・ 野生動物の駆除の話と、ワンヘルスの美しい理念をどういうふうにもマッチングさせるのか。都市の市民からは、街に出てきたイノシシやサルを捕まえてもかわいそうだから山に返してあげなさいという声が多く出るが、農業の現場では受け入れがたい。食育についても同じで、街で育った方に中山間なり山村の現状を多少でも体験していただくことによって、より深い理解に至るのではないかと。やはり体験がなくては、いくらお話ししてもなかなか理解は難しいと思っている。
- ・ 「農林水産業を生業とする農林漁業者」の中には、いろいろなタイプの方がいて多様であるので必要としている施策も違ってくる。社会的な役割もそれぞれ違うものを持っており、それぞれ必要とされていること、行政に期待されていることも違うと思う。兼業農家の方と、農業専門でやっている農業法人で売り上げが何億もある経営者の方では当然、行政に農業地

域の施策に期待することも違う。したがって、施策を実践する中では、「農林水産業を生業とする農林漁業者」の具体的な主体をいくつか類型化し、その類型ごとに抱える解決されない問題によりきめ細かに丁寧に対応する必要があると思う。

- ・ 農林水産省がいう農家の数はどんどん減っているが農業法人は増えている。農業法人が果たす役割が大きくなっているのではないかと思う。農業法人のうちの7割か8割は農家が設立した会社であり、農家とのつながりは深い。個人の農家と株式会社の農業経営とは、抱えている問題も役割も違う。特に農業法人の場合は雇用も平均で10人ぐらいされているので、やはり地域の雇用という面でも、次のテーマのスマート農業への対応力という面でも、個人の農家とは違った役割を持っているので、行政的には細かく対応しようとする大変だと思うが、考える必要はあるのではないか。
- ・ 少し気になるのは、今の日本の財政的な動向を考えた時に、今までやってきたような基盤整備の財源の確保ができるかとはとても思えない。もちろん一部はできるかも知れないが、限られた面積になるのではないか。
- ・ 個人的な農業経営者としての努力で分散しているほ場を同業他社、近くの農業経営の方と相談して、農業経営者間でまずそれぞれの農場として集約しようという話をして、それを地権者に持って行って地権者の同意を得て、自分の農場のほ場をだんだんと団地化していくという集積をしている。農家の複雑な思いもあって、行政がこう言ったからといってもなかなか進まない面もあり、そういうことに積極的に取り組める意思とか能力のある経営者をどうやって育てるかというところに最終的になっていくと思う。そうなったときに、個人経営の農業経営よりも法人化している農業経営のほうが、経営の安定性などといった観点からも、農地を集積しやすいような傾向が見て取れる。そのようなことから、主体の話と農地の集約の話も関係していると思う。
- ・ 農地がだんだん集約されてくると、畦畔除去の問題が出てくる。別の地権者の田んぼが隣り合った場合にその間の畔を抜くと60アールの田んぼとか1ヘクタールの田んぼになるが、私が知っている限りでは、農業経営者の方が主権者といろいろ交渉して地権者と農業経営者の信頼関係において、その畦畔除去を農業経営の責任と費用でやっている。農地の集約化とか畦畔除去の問題でも、農業経営者の方が主体にならないと解決できない面がいくつもあるのではないか。そういう農業経営者の方をどのぐらい育成できるかというのが、スマート農業の導入に関しても、農地の集約化にしても重要な要素になると思う。
- ・ 漁業者は地域に住んでいなければならないという条件があるため、新規参入はなかなか難しい。昔から水揚げをしている人は3分の1ほどになっていて担い手の確保は大変厳しい。
- ・ 収入が上がらないことには担い手は増えない。収入が上がるような改革をしないと非常に難しい。
- ・ 市場にしても、せり下げ方式の今の市場ではだめで、魚市場が栄えないといけない。地産地消につながるので、何かひとつ、目に見える成果が表れる仕組みをつくってほしい。

- ・ 漁業生産額について、同水準の生産額を目指すのであれば、利益率を上げていかないといけない。
- ・ 漁業の場合、気候変動で海も今まで通りではなく、今の水準を維持するのさえ難しい。
- ・ 今回、コロナ関連の販売支援は皆喜んでいて。漁業を一生懸命やっている人は、そういう支援が一番嬉しい。コロナ関連での事業で輪ができていますので、もう少しやると仲間意識ができてよいと思う。水産物を加工する漁業者もいるので、色々な支援をして、支援が万遍なくいくようになればいいと考える。
- ・ スマート漁業などいわれているが、漁業者の高齢化もあり対応できる人が少ないかも知れないが、スマート技術で経験と勘を補完してデータ化できれば、若い子はそういったことに長けているので変わってくるかもしれない。

----- (以下、令和4年2月17日追加記) -----

- ・ 今回の概要案で、農林水産「物」ではなく、農林水産「業」への理解や関わりとしていることは、ひとつの特徴にみえる。
- ・ これまでの情報発信では食文化に重きがおかれていたようだが、これからは、生産物そのものの写真のみではなく、田畑での実り、海での漁、森林や竹林の切り出しなどの生産風景も発信していくとよいのではないか。
- ・ 生産する人々や郷土の自然が重なったイメージが、北九州市民や市外の人々の心に残っていくとよいし、新規参入者や観光客への効果もあるのではないか。
- ・ 多様な担い手の例として、アルバイトやボランティアでの関わりに加えて、賃金を得て勤労することと、無償で活動することとの中間に位置する、例えば「体験隊」などといった新たな参加の仕組みを作ってみてはどうか。「体験」とすれば、本格的なアルバイトではハードルが高いと思う人や、ボランティア組織への正式な加入を決めてかねている人などが、気軽に農林水産業へ入っていく道筋にもなるのではないか。
- ・ 目標では「都市型農林水産業の実現」となっているが、どういった部分が、目指す都市型の農林水産業なのかがわかりにくい。
- ・ 地産地消の実践に関して、消費者が近くに集積している都市型であることをいかして、生産物の廃棄を減らす取り組みができないか。市内産の生産物だけでなく食品全体を大切に食べるようにして、SDGsのいくつかの目標達成にもつなげていってはどうか。
- ・ 北九州市の農林水産物は、美味しさのレベルが高いと感じ、一言でいうと「高品質」なのかもしれないが、それだけではない。それぞれが魅力的な生産物となっているが、発信されている表現が足りないと思う。
- ・ 臨海の工業地帯を持ち、海岸が交通の要衝でありながら、筑前海・関門海峡・豊前海の3つの漁場を有していることは、誇れるのではないだろうか。

- ・ 工業と漁業が共生している街を意味しており、豊かな漁場の資源は環境保全の指標にもなるのではないかと。
- ・ 北九州市の海岸線や漁場の豊かさは、もっと市民が理解して、内外に語るとよいのではないかと。
- ・ 北九州市は都市でありつつも、市域の面積の約 4 割を森林が占めている。森林が二酸化炭素の吸収源となり、北九州市全体の二酸化炭素排出抑制に効果を発揮していくためにも、適正な施業が必要であることを、「2 国土保全・公益的機能の向上」の「荒廃森林の整備」のなかで、さらに強調したほうがよいのではないかと。
- ・ 「多面的機能を発揮している」森林についての指標は、適正な経営管理がされている森林面積の割合、人工林の面積など、何かの集計値とすることはできないかと。
- ・ 将来的にも優れた「たけのこ」の生産を持続していくためには、モウソウチク林との持続的な付き合いが不可欠であり、長期的な視野でモウソウチク林を管理し、利活用していくことを目指す必要があるのではないかと。
- ・ モウソウチク林の各種の竹材資源が循環利用できるように、竹稈の製品、集成材の製品、原材料や燃料などから、まず何かきっかけとなる産業がおこせないだろうか。
- ・ 名のある合馬たけのこがあることの強みを、合馬たけのこ以外の北九州市産のたけのこを生産していく取り組みなどで発揮できないだろうか。
- ・ 北九州市の林業は、周辺地域の素材生産業や林産加工業との流通が必要なため、林業が展開していける、よい連携の方法はないだろうか。本市の林業には、新たなルートやマーケティングの担い手が必要ではないかと。
- ・ ニューUは、10代～30代の若者が主な対象となっているが、農林水産業では定年後の参入も若手の範疇となり貴重だと思う。例えば、定年をきっかけに、ニューUをかかげて、新しい産業概念やライフスタイルを展望してもらったり、同時期に参入する仲間とともにスタートできたりするように活かしたら、新規参入しやすくなりそうである。スタートアップ支援などもあればよいかもしれない。
- ・ 素案を見た所感として挙げると、3つの包括的な政策理念と個別の施策がどう繋がっているのか見えにくい。
- ・ たとえば、SDGsの説明で「農水省でも…農林水産・食品分野におけるSDGsについて理解を深め」とありますが、個別施策のどれが農林水産におけるSDGsについて理解を深めることに繋がるのかよくわからない。また、農林水産業自体をSDGs化していくという部分と、農林水産業の取り組みがSDGsの達成につながるという部分が混在していると思われる。
- ・ ワンヘルスとNew Uについても同じくつながりが見えない感じがする。

- ・ 地産農産物の活用法（レシピ）の提案
ネットで北九州市「栄養士さんの元気レシピ」が1月から12月まで検索することができる。
- ・ 北九州市食生活改善推進員協議会（ヘルスマイト北九州）は毎月健康料理普及講習会をこのレシピを使用して開催し、市民センターで地域住民の方と一緒に調理をすることで地産地消に取り組んでいる。例えば、12月のメニューで「春菊のホットサラダ」は北九州市産の大葉春菊を調理し、生でも美味しく食べられることを伝え好評であった。参考までに、令和4年1月のレシピにはデザートに春菊団子が有る。
- ・ 北九州はアジアの玄関口であり、空港や港など恵まれた輸出環境にあるので、そこを最大限に活かして欲しいと思う。
- ・ 地域の良質な農産物を北九州市が窓口となってアジアに進出していただき、その手数料を税金として北九州市に還元していただければ、地元の作り手としても張り合いが出来るし、より良い品物ができるのではと思う。
- ・ 市役所内に、市役所内の市場の役割を担うようなマネジメント部署を設けて一括管理をしていただければと思う。個人として動くのはなかなか難しいので、販路を広げていただければと思う。